戦争のこわさ

いまの平和の大切さ

読谷中学校一年　照屋　友唯

私たちは、戦争の怖さ、残酷さを知っています。

でも、平和が大切なことも知っています。

いまの平和は、戦争のこわさを教えてくれました。

私は、平和月間の取り組みや祖母の話を聞いて、戦争はイヤだと思いました。

戦争は四五年三月二十六日から六月二十日までの長い間続きました。

その中で、沖縄県民からこわ五千人以上が不足を補うために、住民からこわ五千人以上が動員。

一万三千人以上もの人たちが死傷しました。

上もの人たちが戦死したそうです。

その部隊を読んで、胸が苦しくなりました。

無理やり家族をバラバラにされ、ひどいことをされた。

家族度見ることもできないかもしれないと、当時の人のこころを想像しました。

学校の玄関でも平和パネル展を見学し、不ルの写真から戦争の残酷さが伝わってきました。

パネルの下の説明を読みました。

当時の逃げる住民や戦っている人たちの顔がそれぞれの写真では、まるで今にでてきそうでした。

れんぼをしてもらうほうがいいと思ってしまいました。

昨日の慰霊の日、祖母は戦争のことについて話してくれました。

戦争の時、多くの人が亡くなりました。

一人一人に命があり、自分で死んだり家族を殺されるより、自決したほうがいいと思ってしまいました。

戦争は、人を地獄に落とします。

恐ろしい光景で何のパネルにも写ってもらうほうが親もいいと思ってしまいました。

これらの言葉を聞いたとき、私は言葉が出ませんでした。

一家族を殺すなんて、当時の人たちは命の大切さを全く知らなかったのだと思いました。

私は親の顔の中で、こう考えました。

明日家族と一緒にいられるのかも分からない、自分が生きていることが当たり前だと思いました。

でも、私は、そんなことは思いたくない。

アメリカ兵に殺されるより、家族と一緒に生きていたいです。

そ一緒に死んだお父さんがそれがもし。

はるのだ。

しかし考える余裕が浮かび、当時の人々の考えも少

戦争は人々が人で体験した。

戦争の犠牲者は、

と戦争で生き残った人たちは、

思いもしなかったことだろう。

家族も失い、

一人だけ生き残った祖母がいました。

目の前で人が死ぬ

開いた口もふさがれないでいる。

<u>二</u>

<u>私の胸を締め付けられる言葉は、</u>

<u>戦争のこのような</u>

<u>戦争は絶対してはいけないものだ。</u>

<u>当時の人の四人に一人の人が</u>

<u>亡くなった。</u>

<u>沖縄戦。</u>

<u>その中の少数</u>

<u>私は当時の戦争体験者</u>

<u>命を大切にしなければいけない。</u>

照屋 ゆい

恐いまして。私にできることは小さな子どもが

もしかもんがいじめや暴力をしてきたり

平の怖さやかなしさを語り継いでいきたい。

です。

コクヨ ケ-10 20×20